

★支部大会研究発表題目

◎二〇一一年秋季大会

「11月12日 於・神戸女子大学」

【特集】テクストの生成―草稿・原稿・本文校訂―

司会：渡邊ルリ／西尾元伸
宮内淳子／木田隆文

・久生十蘭「予言」における「語り」の特異性について―「妖術」との比較から―

開信介（京都大学大学院）

・『文づかひ』誕生の現場―森鷗外のテクスト生成過程―

檀原みずず（大阪樟蔭女子大学）

・堀辰雄と『万葉集』

渡部麻実（天理大学）

・エクリチュールの解釈学―森鷗外「舞姫」の改稿をめぐって―

戸松泉（相模女子大学）

・固有名詞と数字―山田美妙『豎琴草紙』典拠考―

須田千里（京都大学）

◎二〇一二年春季大会

「6月9日 於・大阪樟蔭女子大学」

【特集】「科学と想像力」

司会：金岡直子／渡部麻実

木田隆文／長沼光彦

・「想像上の人類学」の受容と変容―外遊以後の荷風におけるゾラの影響―

林信蔵（京都大学非常勤講師）

・安部公房と大阪万博

―速度・時間・言語

友田義行（日本学術振興会特別研究員PD）

・敗戦後の科学的想像力のもたらしたものの―サイエンス・フィクションと小松左京―

澤田由紀子（甲南大学非常勤講師）

・怪異を再編する

―明治後期の文壇における「怪談」ブームをめぐって

一柳廣孝（横浜国立大学）

★支部大会印象記

二〇一一年度秋季大会印象記

二〇一一年度秋季大会は、一二月二日、神戸女子大学三宮キャンパスで開催された。今回の特集は、「テクストの生成―草稿・原稿・本文校訂―」で、作品の生成過程および本文校訂に改めて意識的に向き合うという趣旨で企画された。以下、前半三本の発表の印象を記す。

まず、開信介氏の「久生十蘭「予言」における「語り」の特異性について―「妖術」との比較から―」は、先行研究でしばしば言及されてきた「予言」における「語り」の特異性に関して、同作の原型である「妖術」との比較を通して具体的に検証した。「予言」の語り手は「虚構世界内」に位置しながらも、主人公の安部に関して「虚構世界外」に位置する全知の語り手的な機能を担っており、この存在論的な齟齬が、「語り」に特異な印象を与える。発表の前半は、丁寧なテクスト分析で問題の所在を明らかにしており、説得力があった。しかし、「予言」で用いられた一人称語りが、久生の作家性に由来するといふ後半の指摘は、テクスト分析ではなく回想や座談会の発言に依拠しており、やや説得力に欠けた。作品の生成過程に関わる後半の考察も、丁寧に行う必要があったと思う。

次に、檀原みずず氏の「『文づかひ』誕生の現場―森鷗外のテクスト生成過程―」は、大阪樟蔭女子大学所蔵の「文づかひ 森鷗外自筆原稿」を浄書稿とする説に対して、同資料の丹念な調査によってこれを批判し、さらに、鷗外が落合直文の文法規範に影響を受けたことを踏まえ、原稿に見られる文法上の修正が、同氏の文法書に依拠している可能性が高いことを指摘した。印刷人のサイン、植字工が作業をする際につけた折り皺など、原稿に遺された僅かな

な痕跡をたどることで、同資料が入稿原稿であることを明らかにした。また、文法上の各修正を文法書の記載と逐一照合することで、実証的に影響関係を指摘した。今回の発表では「文づかひ」の自筆原稿に焦点が絞られたが、今後の研究で、鷗外の改稿過程と明治の言語変遷との連動性が明らかにされることを期待したい。

最後に、渡部麻実氏の「堀辰雄と『万葉集』」は、蔵書への書き入れ、草稿やノットを手がかりにして、堀と『万葉集』の関係性を問い直し、幻に終わった「万葉小説」の検討と位置づけを試みた。資料編にまとめられた緻密な「堀辰雄蔵書中の『万葉集』関連書籍調査結果」により、堀の『万葉集』受容を挽歌につぎるとした従来の理解の不十分さを指摘し、防人歌も多く受容していたことを明らかにした。また、草稿「（水のうちへ）」と「（出帆）」を『万葉集』の典拠部分と比較して、天皇の命を受け、家族・故郷と引き離された人々の物語であるという共通性を見出し、幻の「万葉小説」が、戦没兵士たちへのレクイエムとして企図された可能性のあることを指摘した。堀の古典文学受容について、活性化されたテクストでは得られない新たな可能性を示唆する刺激的な発表であった。

後半一本目の発表は戸松泉氏（相模女子大学）の「エクリチュール

ルの解釈学―森鷗外「舞姫」の改稿をめぐって―」であった。「國民之友」(明治二十三年一月)に掲載された「舞姫」の原稿である「森鷗外自筆舞姫草稟」の推敲を中心に考察された。まず、森鷗外が太田豊太郎以外の作中人物を実体化したところを注意深く削除していることを指摘され、鷗外が太田の「手記」であることを重視したと読み取られた。また、「外交のいとぐち(頗る)乱れ」

など時間性を濃厚に映す一段落が削除された点に注目され、「國民之友」という発表媒体の読者層にその理由を求められた。日本に初めて国会が開設されるなど政治動向に注目が集まったなかで発表された「舞姫」にはそうした時代性が強く見受けられると主張された。また、改稿部分の解釈、「憂い」から「恨み」への改稿についての見解は納得出来るものであった。ただ、惜しむらくは、「余」の思いについての考察が、時間不足から端折られたことであった。氏のさらなる考察を聞いてみた

く感じた。

質疑応答では、前半の発表者でもある檀原みすず氏との詳細に亘るやりとりが大変興味深いものであった。戸松氏が発表冒頭で「解釈」行為について述べられたが、本発表を聞き、複数のテクストの「読み」の面白さを実感した。

最後に須田千里氏(京都大学)が「固有名詞と数字―山田美妙『堅琴草紙』典拠考―」というタイトルで

発表された。須田氏はまず、芥川龍之介『るしへる』(大正七年十一月『雄弁』のエピグラフにおける「轍斎布児」という固有名詞が、神崎一作編『破邪叢書』第一集(明治二十六年九月、哲学書院)所収『杞憂小言』から採られたことを指摘し、誤認による校訂が行われた例を挙げ、典拠の確定方法として固有名詞の表記に拘る姿勢を示された。

本発表は、草稿として残された山田美妙の初期作品『堅琴草紙』(明治十八年筆写回覧本『我楽多文庫』、未定稿『怪談雪裏竹』(早稲田大学図書館蔵)の依拠資料の特定を固有名詞・数字に着目して行われたものである。多くのアルフレッド・伝・英国史・地図との比較など、精緻に調べ上げられたその手法には圧倒された。ただし、J. A. Giles の『The life and times of Alfred the Great (1848)』が最も近いと指摘されながらも、ご本人も仰っていたように、依拠資料の特定に至らなかったのがやや残念ではあった。質疑において『堅琴草紙』前半と後半との資料の取り込み方の違い(緻密か煩雑か)から、簡略化された未定稿『怪談雪裏竹』は『堅琴草紙』の後に書かれたのではないかとの可能性を呈示されるなど、関心をそそられる発表であった。須田氏の研究成果により、『堅琴草紙』そして『怪談雪裏竹』における山田美妙の創作手法が明らかにすることを期待したい。

〔杉岡歩美〕

二〇一二年度春季大会印象記

今大会は「科学と想像力」というテーマを掲げて開催された。このテーマは二〇一一年三月一日の東日本大震災と、同日に起きた福島第一原子力発電所の事故に関連して設定されたものであることは明らかだ。このとき起こった「想定外」の事態とは、実際には科学万能を前提とした「安全神話」の言い換えでしかなかったことは、震災と事故後の「未来」を生きる私たちには厳然とした事実である。こうした状況に対して文学および文学研究はどのような役割を果たしてきたのか、もしくは果たすことができるのか。震災と事故から一年あまりの時間を経てそのような問題意識が前景化されたことの意味は大きい。

前半の二つ、林信蔵氏の「想像上の人類学」の受容と変容」と友田義行氏の「安部公房と大阪万博」では震災や原発事故そのものを扱うわけではなく、文学者たちが科学的な知見をどのように自らの表現に接続したのかが論じられた。林氏はゾラのなかに見出される「想像上の人類学」がどのような影響を永井荷風の作品に与えたのかを検証した。友田氏は安部公房や勅使河原宏らが科学技術を裏打ちされた未来のイメージを万博においてどう表現したのか論じていた。

興味深く感じたのは、両氏とも

「原始的」や「原初的」というキーワードを提示した点である。林氏は「進化の過程で手つかずに残った原始的な力」として、「情動的意識」の発見を荷風の「音楽的体験」などと関連させて論じた。友田氏は万博作品を手がかりに安部公房における科学を「未来を空想するもの」、現在の日常を相対化する仮説」であるとともに「より原初的な道具との関係から人間を描く契機」とまとめている。近代の知の基本的な枠組みである科学に人間の原始や原初を対置することによって人間の可能性を見出す。そうしたスタンスが両氏の発表に共通しているように感じられた。科学とは誰のため、何のためのものか。ことに原発事故をめぐるとまざままな言説はそうした疑問を生じさせた。原始への遡及は人間そのものに注目する契機を与えてくれるだろう。

ただし、科学の非人間性を批判するだけでは不十分だろう。原始や原初とは科学によって仮想された理想イメージでしかないだろう。原始に戻れない現在において、人間にとってどのような未来像が想像可能なのか。そうした問いにさらされる必要があるのではないのか。さらにいえば、安易な形で原始を語る言説が大きな全体性の「物語」に回収されることへの危惧も感じる。たとえば、進化や遺伝という近代科学によって見出された言説と帝国主義や民族主義とが共犯関係にあったことを省み

たとき、回帰すべき伝統とは何を想定しているのか。自我の意識の没却の先に何があるのか。ややもすれば狭隘になりがちだが、文学が人間の個別具体的な生を描くものだとするならば、全体性への回収に抵抗し続けるために文学および文学研究に何が必要なのかを改めて問う機会としたい。〔諸岡知徳〕

春季大会後半一人目は、澤田由紀子氏による「敗戦後の科学的想像力のもたらしたもののサイエンス・フィクションと小松左京」であった。澤田氏は、日本SF黎明期からのSF文学史を辿りながら、荒正人や安部公房らの論争を紹介し、SFの今日的な広がり、多様性を準備したと指摘、さらに小松左京『日本アパッチ族』『復活の日』発表へ至る経緯を検証した上で、小松の多様な作家活動及び敗戦体験に基づく『日本沈没』の執筆動機を論じた。『日本沈没』は阪神淡路大震災後、さらに東日本大震災後と、二度に渡って現実を予言していると注目を浴びたが、そうした評価の仕方は「文学的評価とはまるで無縁である」(安部公房)として、『日本沈没 第二部』と合わせた上で作品の本質を考えるべきだと指摘する。例えば、作品中で語られるプレート・テクトニクス理論が、『日本沈没』によって広範に周知されたことなどをあげ、SFの担ってきた啓蒙性と同時に、「ナカタ過程」といった架空理論の設定によ

る迫真性の加味を論じた。また『日本沈没』を通して人類と科学力について、あるいは日本という国家や日本人について、小松の日本(人)観を提示した。会場からは『日本アパッチ族』との関連性、発表要旨にある「現実」と「SFの想像力」に関する言及、さらに小松のナショナルイズム回帰に対する質問等があったが、発表者が扱おうとする内容の膨大さは論文二〜三本分にも相当すると思われ、今少し掘り下げた考察が聞きたい恨みが残った。

後半二人目、一柳廣孝氏「怪異を再編する―明治後期の文壇における「怪談」ブームをめぐる」は、明治後期の特に「新公論」「新小説」の怪談特集号を中心に怪談の流行を追いながら、怪異を解釈するフレームの再編について考察するものであった。氏は明治半ばから末にかけての怪談会の活性化、「百物語」的な新聞記事の増加、さらに西欧から移入された心霊研究の紹介などを踏まえ、それが明治四十年代の文壇へ波及していく様を、年表的に整理された資料によって提示して見せた。その過程で、明治三十年代から四十年代にかけての、怪異を解釈するフレームに変化が見られるのではないかと指摘する。具体的には、怪異怪談の類を神経的なものと位置づけてきた井上円了的な言説を過去の枠組みとして、新たに全てを神経とは見せないとする、科学的な心霊研究のスポークスマンとなった平井金三

な言説が浮上してきた、ということであった。円了はその著作において必ずしも怪異全否定ではないと自ら断っている。そういう側面が当時の円了否定派になぜ無視されたのかというところが気になったが、全般に手堅く聞き取りやすい内容で、明治期の円了中心主義を脱する、新たな怪異解釈に焦点を当てた、怪談好きには刺激的な発表であった。〔奈良崎英穂〕

★会員の業績

(凡例)
著書名：『』
論文名：「」
掲載紙誌名：『』
注記等：()

※関西支部会員の業績のうち、一一年四月から一二年三月までに発表されたものを収録した。

※各業績に付した番号のうち、①は単行本、②は雑誌・単行本等収録論文、③はその他(研究ノート・書評・口頭発表・項目執筆等)を示す。なお、①は書名・出版社・発行年月の順、②は論文タイトル・掲載誌・発行年月の順、③はタイトル・掲載書(発表会名)・発行年月(日)の順で記した。

※掲載紙誌の巻号数は省略し、雑誌・単行本は発行年月のみ、新聞・会報等は発行年月日を記した。

※原則として、その他業績の種別、執筆項目等の詳細、編者名・発行所名等は会員の届出に記載のあったもののみを記した。

※著者名・論文名・掲載紙誌名の用字は、会員届出の記載に拠った。

ア行の部

青木亮人

②「明治の蕪村調、その実態―俳人漱石の可能性について―」『日本近代文学』一一年五月
②「その眼、写生につき 子規、放哉、三鬼を貫くもの」『ユリイカ』一一年一〇月
②「寺田寅彦、「写生」句の逸話」『俳文学研究』一一年一〇月

②「昭和の島原、太夫道中のひとと き―高浜虚子・島原の太夫の道中―について―」『角屋研究』一二年三月
②「近代俳句の同時代評」『俳文学研究』一二年三月

③連載「あの頃、俳句は(二八)〜」『円虹』一〇年四月〜連載中
③連載「批評家達の写生 保田与重郎(五)〜」『翔臨』一〇年四月〜連載中

③ラジオ「ことばの花束」(エフエムいたみ)一一年四月〜放送中
③講演「近代短冊の見方、愉しみ方」(春季特別展記念講演、於柿衛文庫)一一年四月二三日

③項目執筆「島崎藤村」「北村透谷」「土井晩翠」『文体・文章語辞典』朝倉書店 一一年六月

③「有季定型と「写生」は結婚しうるか 彌榮浩樹「1%の俳句」を読む(一)〜(三)」「週刊俳句」一年六〜七月

③講演「失われた季節感 江戸と近代の季重なりについて」(第三十回夏季俳句指導講座、俳人協会主催、於エルおおさか)一年八月一日

③テレビ「NHK俳句」(NHK)一年八月七、一〇日

③講演「俳句の切れ味、ユーモア」(現代俳句夏季講座、俳人協会・京都コンソーシアム主催、於龍谷大学)一年八月八日

③「はるかな帰郷 田中裕明の詩情について(1)」「静かな場所」一年九月

③項目執筆「蔡徳三」「綾見謙」「岩木躑躅」「川西和露」「藤井紫影」「山田弘子」「兵庫近代文学事典」和泉書院一年一〇月

③「高野素十『初鴉』の凄さ」「秋草」一年一二月

③インタビュー「現代俳句の新しい波」『日本経済新聞』一年一二月二日

③講演「汽罐車の俳句と映画の関係」(宇治東陵高校特別授業)一年一二月一三日

③「詩にすがる念力―大正期の飯田蛇笏について―」「傘」一年一二月

③講演「山口誓子における俳句・映画・写真の関係」(大阪俳句史研究会、於柿衛文庫)一年二月二五日

『翔臨』一年三月

③「はるかな帰郷 田中裕明の詩情について(2)」「静かな場所」一年三月

③「取りかえのきかないもの 中村堯子『ショートノウズ・ガー』評」「銀化」一年三月

大橋毅彦

③講演「すみれ色の蝶ネクタイと真白な快走艇―稲垣足徳・竹中郁とその仲間たちの世界―」(神戸文学館土曜サロン)一年五月

③項目執筆「坂本遼」「竹中郁」「陳舜臣」ほか二〇項目 『兵庫近代文学事典』和泉書院 一年一〇月

③解題 室生犀星「性に眼覚める頃」・「或る少女の死まで」ほか一八編 日本近代文学館編『滝田樗陰旧蔵近代作家原稿集解説・解題』八木書店 一年一〇月

③講演「上海租界劇場文化の歴史と表象―ライシャム・シアター(蘭心大戲院)の一九三〇〜四〇年代」(名古屋大学大学院文学研究科附属日本近現代文化研究センター主催「文化の越境、メディアの越境―翻訳とトランスメディア」)一年一二月

③基調報告「文芸・文化関連記事から見た『大陸新報』」(日本上海史研究会・大陸新報研究会主催、20世紀メディア研究所後援「ワークショップ『大陸新報』をめぐる―山本武利著『朝日新聞の中国侵略』を発条にして―」)一年一二月

③コメント 山口俊雄編『日本近代文学と戦争―十五年戦争―期の文学を通じて』(三弥井書店)二五四〜二五六頁(一〇年一月愛知県立大学で開催された公開研究会「日本近代文学と戦争―十五年戦争―期の文学を通じて」上での発言)一年三月

カ行の部

木村小夜

③項目執筆「斎藤栄」「馬田亮」「梅田寛」「田中孝」 『兵庫近代文学事典』和泉書院 一年一〇月

③口頭発表「清貧譚」における「ロマンチズム」(韓国日本近代文学会)一年一二月五日

熊谷昭宏

③「上田敏「落葉」、蒲原有明「霊の日の蝕」、薄田泣菫「白すみれ」」中村明ほか編『日本語文章・文体・表現事典』朝倉書店 一年六月

倉西聡

②「横溝正史・その中期作品群への軌跡―エラーリー・クイーンの作風の移入に関する問題―」『武庫川国文』一年一二月

②「横溝正史「鬼火」に窺われるもの―谷崎潤一郎とエラーリー・クイーンと―」『日本語日本文学論叢』一年三月

小林幹也

③単著・評論集『短歌定型との戦い

―塚本邦雄を継承できるか―』短歌研究社 一年四月

③評論「クレーム対応力―三枝昂之氏への反論―」『短歌往来』一年六月

③書評「介護詠としてではなく―木畑紀子著『曙光の歌びと―桑原正紀』を読む」書評―『短歌研究』一年一〇月

③評論「ヒューモアとしての写生論」『短歌現代』一年一二月

③書評「今は許せ―島内景二歌集『夢の遺伝子』書評―」『玲瓏』一年一月

③評論「継承について―久保茂樹をはじめ『塔』の初心者へ―」『塔』一年一月

サ行の部

佐伯順子

①「海外における「忠臣蔵」―翻案と研究―」(日本比較文学会編『越境する言の葉―世界と出会う日本文学』彩流社)一年六月

③「ヨーロッパの「漫画学会」『アステイオン』(阪急コミュニケーションズ)一年五月

③「石田氏の書評に込めて」(『女装と男装』の文化史)書評リプライ)『論叢クイア04』(クイア学会)一年九月

③「苦い二十五年『女』という快楽」『現代思想 一二月臨時増刊号』青土社 一年一月

③「越境アイデンティティ」の時代―ポップカルチャーと現代の若

者」（北九州市立男女共同参画センター・ムーブ編『ポップカルチャーとジェンダー』ムーブ叢書 ジェンダー白書8 明石書店）一二年三月

佐藤秀明

① 共編著『同時代の証言 三島由紀夫』鼎書房 一一年五月
② 「生きながらえた三島由紀夫の最終章」『国文学解釈と鑑賞』一一年四月

③ 「三島由紀夫の側面——平岡定太郎の影」『悲劇喜劇』一一年四月
③ 「私のおすすめ」『毎日新聞』一一年一二月まで月一回連載
③ 「早春の彦根」『季刊文科』一一年五月

③ 「『豊饒の海』創作ノート⑧」共編『三島由紀夫研究』一一年九月
③ 「歴史小説に恋して——司馬遼太郎作品を中心に」（小日向えりとの対談）『読売新聞』大阪本社版 一一年一〇月三一日
③ 「肯定のミステリー——『象と耳鳴り』論」（『現代女性作家読本⑭ 恩田陸』鼎書房）一二年二月

真銅正宏

① 『近代旅行記の中のイタリア』学術出版会 一一年一二月
② 「リアリズムからの脱却——読者の手による「虚構」——」『国文学解釈と鑑賞』一一年九月
② 「歌留多会から——明治の男女の「ふれあい」——」『人文学』一一年一

② 「視覚の喪失と手触り——指先と耳が探りあてるもの——」『人文学』一二年三月
③ 「永井荷風」『日本語文章・文体・表現事典』朝倉書店 一一年六月

③ 「小説の中の偶然——文学性・虚構性・偶然性」（大谷大文学術学会公開講演会・筆録）『文藝論叢』一一年一〇月
③ 項目執筆「白洲次郎」「白洲正子」

「武田芳一」「筒井康隆」「永井荷風」「夏石番矢」「藤木明子」『兵庫近代文学事典』和泉書院 一一年一〇月
③ 口頭発表「小説の中の偶然——文学性・虚構性・偶然性——」（大谷大文学術学会、於大谷大学）一一年七月五日

③ 口頭発表「日常空間と文字記号の空間——文学者の日記を補助線として——」（日本近代文学会秋季大会シンポジウム「文学と公共性——研究環境・研究方法の前線（五）」、於北海道大学）一一年一〇月一五日

須田千里

② 「『俗天使』とミケランジェロの聖母」『太宰治研究』一一年六月
② 「芥川龍之介「切支丹物」の材源——『るしへる』『じゆりあの・吉助』『おぎん』『黒衣聖母』『奉教人の死』——」『国語国文』一一年九月
② 「芥川龍之介「切支丹物」の材源（二）——『さまよへる猶太人』——」『京大文学論叢』一一年

九月
③ 項目執筆「泉鏡花」「高浜年尾」「北条敦子」「宮林太郎」「村尾昭」『兵庫近代文学事典』和泉書院 一一年一〇月

③ 口頭発表「固有名詞と数字——山田美妙「堅琴草紙」典拠考——」（日本近代文学会関西支部秋季大会、於神戸女子大学三宮キャンパス）一一年一〇月一〇日

③ 書評「論集 泉鏡花 第五集」『泉鏡花研究会会報』一一年一二月
③ 「資料紹介 『逗子より』」、「資料紹介 『青切符』の再掲」『泉鏡花研究会会報』一一年一二月

夕行の部

田中裕也
② 「三島由紀夫「親切な機械」の生成——三島由紀夫とニーチェ哲学——」『日本近代文学』一一年五月
② 「三島由紀夫「青の時代」の射程——道徳体系批判としての小説——」『昭和文学研究』一二年三月

戸塚麻子

② 「対話と友情の不可能性——中薊英助「烙印」『群系』——」一一年七月
② 「『慈悲』のユートピア——木村曙「婦女の鑑」『芸術至上主義文芸』——」一一年一二月
② 「王道楽土の夢、「河向う」の幻——中薊英助「密作者」——」『日本文学誌要』一二年三月
③ 項目執筆「猫の草子」「新うたかたの記」「花の下もと」『円地文字

事典』鼎書房 一一年四月
③ 口頭発表「須藤南翠『新粧之佳人』」（日本文学協会近代部会）一二年三月一八日

外村彰

① 編著『外地の人々——（外地）日本文学選——』龜鳴屋 一一年五月
① 共編著『大野新全詩集』砂子屋書房 一一年六月
② 「室生犀星『幼年時代』『結婚者の手記』と犬」『呉工業高等専門学校研究報告』一一年一〇月

② 「犀星 庭と生きもの小説考——五つの短篇から——」『室生犀星研究』一一年一〇月
③ 項目執筆「岸上大作」「樟位正」「高瀬隆和」「野村泊月」「平山蘆江」「森田栄一」『兵庫近代文学事典』和泉書院 一一年一〇月
③ 「多喜さん漫筆（二）」『ぼかん』一一年一二月
③ 「徒然草 兼好」『図書だより』一一年一二月
③ 「意力の持続とその成果——〇九年韻文研究（近現代）」『文学・語学』一一年一二月

友田義行

① 『戦後前衛映画と文学——安部公房×勅使河原宏』人文書院 一二年二月
② 「テクノロジーと身体——安部公房

- のバーチャル・リアリティ』『生存学』一一年五月
- ②「映像のなかの原爆乙女―安部公房／勅使河原宏映画『他人の顔』論』『日本文学』一一年一月
- ③文学年表「日本文学各国語訳年表」『越境する言の葉―世界と出会う日本文学』（日本比較文学会編 彩流社）一一年六月
- ③「研究動向 昭和文学と映画」『昭和文学研究』一一年九月
- ③エッセイ「安部公房研究室」と開拓精神」『郷土誌あさひかわ』一一年一〇月
- ③項目執筆「浦山桐郎」「加藤泰」「鄭義信」「原健三郎」「船原長生」『兵庫近代文学事典』和泉書院 一一年一〇月
- ③口頭発表「日本映画と日本文学の 相関研究史」（一九五〇年代日本〈映画―文学〉相関研究会）一一年七月
- ③口頭発表「戦後映画運動への視点―シネマ57の顛末」（一九五〇年代日本〈映画―文学〉相関研究会）一一年九月
- ③口頭発表「安部公房文学室からの展望」（占領開拓期文化研究会）一一年九月
- ③口頭発表「安部公房作品の『子供』考―ネオリアリズムおよびチャップリンとの比較から」（一九五〇年代日本〈映画―文学〉相関研究会）一二年二月

ナ行の部
内藤由直

- ②「犬田卯「開墾」の普通選挙批判―プロレタリア文学運動の方向転換に対する反措定―」『立命館言語文化研究』一二年二月
- ③「鈍行安宿調査旅行」『花園大学日本文学科通信』一一年七月
- ③項目執筆「鶴崎鷺城」兼高かおる「生江健次」『兵庫近代文学事典』和泉書院 一一年一〇月
- ③書評「棚沢健著『だから、鶴彬―抵抗する17文字』」『図書新聞』一一年一月五日
- ③書評「浅川史著『魯迅文学を読む―竹内好『魯迅』の批判的検証』」『日本文学』一一年一月
- ③「占領と開拓」の問題系―「占領開拓期文化研究会」活動・成果報告―」『立命館言語文化研究』一二年二月
- 永井敦子
 - ①「寄贈寄託書簡 平成十八年〜二十二年」芦屋市谷崎潤一郎記念館発行 一一年六月
 - ②「関西移住で独自の境地―大正時代の谷崎潤一郎―」『上方芸能』一一年九月
 - ③「妖しの世界への誘い―谷崎・乱歩・横溝」展を開催して」『センタ―通信』（立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター）一二年三月
- 永瀧朋枝
 - ②「執筆目録―細川武子、正宗乙未、島崎静子―」『神女大國文』一二年三月
 - ③「第37回全国大会と『蚯蚓（みみず）』」『北村透谷研究』一一年六月
 - ③項目執筆「千原叡子」「中井昭子」『兵庫近代文学事典』和泉書院 一一年一〇月
 - ③「導入教育と島崎藤村研究（キヤンパス通信）」『毎日新聞』（兵庫）一一年二月六日
 - ③書評「榎林晃二著『日本近代文学の内景―様々な断層―』」『榎林晃二著作集第四巻』『社会文学』一二年二月

- 西尾元伸
 - ②「『楊柳歌』の京都、あるいは清水寺―（観音功德）の顕現をめぐる―」『論集泉鏡花 第五集』（和泉書院）一一年九月
 - ②「泉鏡花『海神別荘』考―（舞台演出）に注目して」『待兼山論叢（文学篇）』一一年十二月
- 西村英津子
 - ②「広津柳浪『女子参政屢中楼』―自由民権運動と女性―」『近代文学研究』一一年四月
 - ③「『語り』の静を代弁して」『葦の葉』一一年六月
 - ③口頭発表「仮名垣魯文『高橋阿伝夜叉譚』―一途な女の反骨精神を読む―」（日本文学協会近代部会夏季研究集会）一一年八月
 - ③口頭発表「泉鏡花『龍潭譚』論―

- ―反国家の様相を読む―」（阪神近代文学会冬季大会）一一年二月
- ③「井上光晴『西海原子力発電所』―原発をめぐる片づかない（文脈）―」『葦の葉』一二年三月
- 野田直恵
 - ③書評「外村彰著『岡本かの子 短歌と小説―主我と没我と―』」『昭和文学研究』一一年九月
- 信時哲郎
 - ③「イーハトーブ〈鉄道〉学 鉄道が切り開いた宮沢賢治の表現世界」『宮沢賢治学会イーハトーブセンター会報 42 シグナル』一一年四月
 - ③項目執筆「手塚治虫」「玉岡かおる」「矢沢あい」「竹本健治」ほか『兵庫近代文学事典』和泉書院 一一年一〇月
 - ③「鉄道」から読み直す宮沢賢治」『宮沢賢治記念館通信 106』一二年二月
 - ③研究動向「宮沢賢治（韻文）」『昭和文学研究 64』昭和文学会 一二年三月
 - ③「社会主事 佐伯正氏」『宮沢賢治学会イーハトーブセンター会報 44 琥珀』一二年三月
- ハ行の部
日高佳紀
 - ②「〈古典回帰〉再考―谷崎潤一郎『蘆刈』と歴史叙述―」『文学・語学』一一年一月
- ②「MODERNITY AND TANZAKI

JUNICHIRO'S STYLE REFORM: THE THOUGHT PROCESS LEADING TO "THE TASTE FOR CLASSICAL JAPANESE HISTORY OR LITERATURE" "COGITO" Vol.IV, No.1 一二年三月

③書評「佐藤淳一」『谷崎潤一郎 型と表現』(青簡舎刊)、『図書新聞』一一年一月五日

③口頭発表「エキゾチズムの在処―村上春樹「スプートニクの恋人」のミュー―」(国際学術会議「近代転換期の東アジアの文学・文化への再認識：横断と接境」、於慶尚大校) 一一年九月二三日

マ行の部

峯村至津子

②「泉鏡花「外科室」の語り手―天なく、地なく、社会なく―」『女子大国文』(京都女子大学国文学会) 一二年一月

③講演「近代文学と祇園―岡本綺堂「鳥辺山心中」をめぐって―」(八坂文化セミナー、於八坂神社) 一一年五月

②講演要旨「近代文学と祇園―岡本綺堂「鳥辺山心中」をめぐって―」『祇園さん』一二年一月

ヤ行の部

山田佳奈

②「太宰治「魚服記」試論―逃れられなかったスワー―」『日本語日本文学論叢』一二年三月

ワ行の部

和田 崇

②「終戦直後の関西雑誌メディア」『言語文化研究』一二年二月

③「講演会「プロレタリア作家葉山嘉樹と現代」印象記」『徳永直の会報』一二年一月

③「研究動向 関西の雑誌メディア」『昭和文学研究』一二年三月

和田芳英

②「昇曙夢のトルストイ研究―明治時代を中心に―」『日本トルストイ協会報 緑の杖』一二年三月

②「蘊奥を極めた昇曙夢のロシア文学研究―昇曙夢研究から見えてきたもの― ロシア文学研究の先駆者、昇曙夢を語る」『日本ロシア文学会第61回研究発表会(於慶應義塾大学)』(シンポジウム報告要旨) 一一年一〇月

③「昇曙夢の命日に寄せて―蘊奥を極めたロシア研究―」『南海日日新聞』一一年一二月一日

③「昇曙夢研究の現状―昇曙夢の学問を正當に評価できなかった要因について―」(ロシア文学者「昇曙夢」シンポジウム、鹿児島県立奄美図書館主催) 一一年一二月一日

③「昇曙夢関連の話(奄美テレビ)。(あまみF・M)」

渡邊ルリ

②「中島敦『名人傳』論―「射の精神」を問う「寓話」―」『ASIA―社会・経済・文化―』(東大阪大学

アジアこども学科) 一二年三月

③研究ノート「絵本の中のカメレオン」『東大阪大学・東大阪大学短期大学部教育研究紀要』一二年三月

事務局から

■「会報」15号に以下の誤りがございました。お詫びして訂正いたします。

4頁3段27行目「会員の業績」欄、工藤哲夫氏の項目

【誤】②「貝の火」の正しい手入れ法―中尾清藏「蛋白石概論(二)」からの考察―」『女子大國文』一一年一月

【正】②「貝の火」の正しい手入れ法―中尾清藏「蛋白石・論(二)」からの考察―(注記：澤井麻妃子との共著。「清藏」&「・」の字は旧字体。)『女子大國文』一一年一月

○日本近代文学会関西支部兵庫近代文学事典編集委員会編『兵庫近代文学事典』(和泉書院 五二五〇円)が刊行されました。ご購入ください。

○維持会費の納入がたいへん少ない状況です。ご協力のほど、何卒よろしく願います

☆関西支部公式ブログ

<http://www7b.biglobe.ne.jp/~kansai-amj/s/>

今後も、こちらのブログに日本近代文学会関西支部に関する情報を掲載していきます。

☆関西支部メールアドレス

事務局(運営委員長・日高佳紀)
hidakay@nara-edu.ac.jp

日本近代文学会関西支部会報 第十六号
二〇一二年八月三十日発行

発行者・大橋毅彦(支部長)
発行所・日本近代文学会関西支部事務局
〒630-8528 奈良市高畑町
奈良教育大学 日高佳紀研究室内